

「為せよ、屈するなかれ。時重なればその事必ず成らん」

園長 児嶋 草次郎

選挙遊説中の安倍元総理が 41 歳の男に暗殺されました（7月8日）。信じられないことですが、その現場での瞬間映像がテレビでも流れ、新聞でも繰り返し大きく取り上げられ、間違いのないでしょう。白昼夢ではない。命とははかないものです。この男の暴挙に強い怒りを感じています。

そのニュースに接した時、私の頭の中でまず浮んだ言葉は、「為せよ、屈するなかれ」でした。この言葉は、石井十次の言葉ですが、2016年（平成28年）1月22日、国会での施政方針演説のまとめの部分で、当時の安倍首相が引用されたのです。もう一度その時の首相の言葉をここに記します。

『挑戦』。日本で初めての孤児院を設立した石井十次は、児童福祉への『挑戦』に、その一身をささげました。たくさん子どもたちを、立派に育て上げ、社会へと送り出しました。孤児がいれば救済する。天災の度に子ども数が増えていきました。食べ物が底をつき、何度も困窮しました。コレラが流行し、自らも生死の境をさまよいました。しかし、いかなる困難に直面しても、決して諦めなかった。強い信念で、児童福祉への『挑戦』を続けました。

『為せよ、屈するなかれ。時重なればその事必ず成らん』。

第二次の安倍内閣を率いる安倍元首相の意気込みと志が充分に感じ取れる言葉でした。その後の「日本を取り戻す」ための、世界を股にかけた御活躍、特に政界でのリーダーシップは、まさに、「挑戦」の文字にふさわしいと感じます。その評価は色々ですが、20年後、30年後、日本の未来の人々が正当に決めるのでしょうか。

事件後、新聞はもちろんですが、週刊誌も含めて、その真相が知りたくて私なりに情報を漁りました。それらの中で、安倍元首相に関して書かれた評で一番目を引いたのは、草間吉夫氏（元茨城県高萩市長）の言葉です（「福祉新聞」7月26日付）。草間氏は、児童養護施設で育ち、東北福祉大卒。施設出身ということで話題にもなりました。高鍋にも来られたことがあり、子供たちと一緒に講演も聞かせていただきました。高萩市長になった（2016年）後の話だそうです。

「私の経歴を知った元首相や昭恵夫人から、知人を通して連絡があった。都内のホテルで会食した際の元首相はとても気さくで、多くの質問を受けた。」「その後、元首相は、自民党の『児童の養護と未来を考える議員連盟』を設立し、13年まで会長に就任した。」

「当時、配置基準は小学生以上の子ども 5.5 人に対して職員 1 人。」「当初 5 対 1 にすることで調整が進んでいたが、突如 4 対 1 で決着した。」

そして、草間氏は、こう評価しておられます。「社会的養護の良き理解者と支援者であり、不世出の政治家だった。」

その血筋・家系からしても雲の上の人だと思っていたのに、実は我々に近いところにいてくださったのだと知り、驚きました。あの「為せよ、屈するなかれ」を引用してくださった時、お礼状を出すべきだったと、今、後悔しています。

『ありがとうございました。天国からお守りください。』

その安倍首相を手製の銃で銃撃した山上徹也容疑者（41歳）のことを、その後ずっと考えています。この平和な日本で、あり得ないことを凶行してしまったこの男は、なぜ自分をここまで追い込んでしまったのか。家庭において十分に愛情を得ることのできなかったことが多い子供たちと生活を共にしている立場の人間として、他人事のように感じられなかったのです。

まず思い出したのは、私たちと同じ団塊の世代の永山則夫事件です。今から50年以上前1968年に、盗んだ拳銃で男性4人を殺害しました。家庭が崩壊（父や母の家出）した状況の中で、兄弟が多く、虐待、極貧、義務教育も十分に受けられない等の生活が、彼の心を崩壊させていきました。あの頃はまだ日本が発展途上で、貧困が事件を生んだとも言われました。今回の事件はそれとは異質のようにも思われます。あの当時の貧しさに比べれば、進学もある程度保障されているし、努力すれば這い上がるしくみも社会には用意されている。何が彼を絶望させ自暴自棄にさせたのか。

「死んだ父は京大出身だった。父の兄は弁護士、母は大阪市大卒の栄養士、母方の叔母は医者だった。そんな環境でオレは優等生として育った。オレの努力もあったが、そういう環境でもあったんだろう」（週刊文春7・28）。

これは、彼自身がスマートフォンに書きこんだツイッターだそうです。かなり高いプライドと家系への誇りを持っていたと思われまます。

父親が母親の父（祖父）の興した建設会社で働いていた頃は、順風満帆の生活であったようです。父親は事業の後継ぎとしても期待されたことでしょう。しかし、この後、不幸が続きます。長男（山上容疑者は次男）に小児がんが判明（その後30代半ばで将来を悲観し自殺）。父親は山上容疑者が4歳の時に自殺。その頃から、母親がある新興宗教にのめり込むようになり、次々に多額の寄付をしていきます。父親の死亡保険金、祖父が亡くなった後の会社の売却金等合わせると1億円以上をその宗教につき込んだとか。そして山上家は破産します。

それでも山上容疑者は、地元奈良県の名門高校に進学し、卒業もしています。家庭は崩壊状態にあったかもしれませんが、高校まで卒業できればあとは自分の力ではい上がったのではないかと思うのですが。

「大学は入学金や学費の問題があって、断念せなあかんかった。それで公務員として働こうと、進路を変えたんです。消防士になりたいという話が徹也からあり、そのための予備校にも通わせました」「消防士の試験、筆記は通ったんやけど、実技で落ちて。かなりの近眼だったからでしょう。」（週刊新潮7・28 弁護士をしていた伯父の言葉）。

そして、彼は海上自衛隊に入隊。しかし、それから2年半後自殺未遂事件をおこしてしまいます。その後、アルバイトをしながら宅地建物取引士等の資格も取得しますが、今度は兄が自殺。絶望感を抱き、仕事も定まらなくなり、恨み・憎しみをつのらせていき、今回の事件へ向けて怒りを増幅させていったようです。

アレコレ考えている時に、2008年秋葉原無差別事件の犯人加藤智大（ともひろ）死刑囚（39歳）の刑が執行された（7月26日）というニュースが飛びこんで来ました。青森県内有数の進学校を卒業し自動車関係の短大に進学。しかし、卒業後職場を転々とする一方で携帯電話にのめり込んでいく中で、世の中を恨むようになったようです。

確井真史・新潟青陵大教授は次のように述べておられます（読売新聞7月27日付）。

「加害者に共通するのは、孤独感と強い絶望感だ。普通なら犯行を思いとどまらせてくれるはずの家族、友人、仕事を全て失い、自らの人生を終りにしようとして、逮捕を恐れずに『白昼堂々』と事件を起こしているという共通点もある」。

今ロシアのウクライナへの侵略で、多くの人たちが家族を失い家やすべての財産を失ったりしています。日本でも、津波や川の氾濫等で、多くの人たちが家族を失い家やいっさいの家財道具を失ったりしています。しかし、ほとんどの人たちは絶望から立ち上がり、未来を信じて、たくましく再び生きようとされます。それが人間としてのあるべき姿です。遠い昔の先人たちが、どんな天災・人災があろうと、生きのび繰返し立ち上がって来たから、現在私たちはこの大地で生きておれるのです。それが人間の歴史でしょう。

2011年の東日本大震災の時、海岸地方の村々で、家族や家を失った人たちが連絡も支援もない中で、持っている食料を持ち寄って生き延びようとした姿は、世界の人々を感動させました。欧米であるような略奪等とは全く逆の自律した生活と助け合いを、東北の人たちは私たちに示してくださったのです。これは日本人としてのDNAだと確信し、我々自身が常に自覚し、また子供たちにも精神文化として伝えていくために、石井記念友愛社の三つの方針、家族主義、友愛主義、自然主義に、新たな4つ目として「自律主義」をこの後加えさせていただきました。

戦後、欧米の民主主義教育が入って来て、私たち団塊の世代も権利意識を持つようになりました。戦争を放棄し、経済も復興し、平和な生活が送れるようになりました。しかし、どこかで、平和ボケではないですが、私たちはこの豊かさと平和は、ずっと保障されるものであると誤解してしまったのかもしれない。戦後70年がすぎ去り、今、団塊の世代の子供たちが親世代となっています。団塊の世代の親たちは、先人たちが長い歴史の中でみがいて来た日本人としての精神文化を、しっかり我が子たちに伝えて来たのでしょうか。団塊の世代は戦前の価値を否定するような教育を多く受けて来ており、もしかしたら、我が子たちに伝えきれてないのではないか。

石井十次資料館の研修館に、「石井十次青春物語」と題するイラストのパネルを14枚並べています。これらを説明する時、私は「挫折からの立ち直り三原則」を説くようにしています。①親の愛情、②志教育、③出会いです。石井十次の少年時代は、まさに七転び八起きで、犯罪者になってもおかしくないような挫折を繰り返しているのです。偉かったのは親でしょう。愛情はもちろんたっぷり注いでいるのですが、先手を打って志教育をし、出会いの準備をやっていったのです。十次少年は失敗しても絶望する間もなく、新たな志を持って立ち上がりました。彼をうまく導く出会いにも恵まれました。おそらく、そのような文化が当時あったのでしょう。父親は自分の人脈をしっかりと活用し、また地域社会の力も借りながら我が息子を導きました。当時の子供たちは、多くはそのような環境の中で育っていったのだと思います。

現代はどうか。民主主義が根付いたのはよいのですが、個人主義が過度に進み、特に都会においては、ほとんど互いに干渉し合わなくなり、地域社会の共助は成り立たなくなっています。家族間においても、個室やケイタイ等の普及により、その交流は薄いものになってしまっています。

さきほど、私は今回の事件を他人事のように感じられないと書きました。施設に来る子供たちは様々な事情で親子関係をいったん切られています。子供にとっては一つの挫折です。虐待を受けたりネグレクト状態を経験した子供は、本人が意識するしないにしろ、強い人間不信や恨みを抱いている場合もあります。そういう子供たちに対して職員のやるべきことは、「挫折からの立ち直り三原則」にのっとった指導です。まず、親の代りにしっかり愛情を注ぐこと。そして思春期になれば、不信や恨みが表面化して来ますので、志教育です。それぞれの能力・資質に応じて、将来への夢を養っていかねばなりません。世のため人のために自分も役に立てるという自信と志を、厳しい園生活を通して培っていくのです。出会いについては、まず、職員個人との出会いが大事です。一生付き合うくらいの心の広さが職員自身に必要です。サラリーマン根性だったら、すぐ、子供たちは見抜いて心を開い

てはくれません。能力・資質に応じて、しっかり進路を準備していくことも大事です。大学へ進学すればよき師、良き友人との出会いが待っています。これら一連の指導は、なまやさしいものではありませんが、子供の運命を変える支援ですので、それなりの覚悟が必要です。

元首相を銃撃した41歳の男は、自分が家庭の事情で大学に進学できなかったことが、一番許せなかったのではないかと感じます。世の中には親を頼れず色んな手を使って自分の力で大学に進学する少年も数多くいるのですが、彼のプライドが許さなかったのかもしれない。自衛隊に入った時も運命を変えるチャンスでした。自衛隊には、家庭の事情で入隊している青年も多くいるからです。友愛園の卒園生の中にも自衛隊で出会いに恵まれ救われた者もいます。銃撃男はその時すでに心を閉ざしていて、他との間に壁を作っていたのでしょう。運命を変えるチャンスはいくらでもあったろうに、残念でなりません。母親がその信仰する新興宗教に貢いだお金の金額があまりに高額であることで、今世間はそちらの方へ批判の矛先を向け始めていますが、彼以上に苦勞して来た少年・少女を、私はここで何人も見て来ています。虐待を受けて育っても、ここでしっかり運命を変える生活をし、社会に出てりっぱに生きている青年もいます。親が自分を生んでくれたことに感謝しながらです。

挫折は人生において必ずある、早いか遅いかの違いだけだ。先人たちはそのように教えて来たのだと思います。本来教育とは、その挫折を前提として、そこから立ち上がる術を教えるものなのでしょう。「戦後レジーム」から脱却し自信と誇りを取り戻そうと一番に訴えた元首相が、そのレジームから排除されてしまった男に殺されるなんて、なんと皮肉な不幸なめぐり合わせなのでしょう。天は我々に何を求めているのか。

「為せよ、屈するなかれ。時重なればその事必ず成らん」。

石井十次の言葉を噛みしめながら、また、この言葉を安倍首相の遺言として受け止めながら、日々の仕事に粛々と取り組んでいきたいと思えます。